

平成 19 年 8 月 26 日

平成19年度 教師海外研修(ネパールコース)研修報告書

学校名 高松市立木太中学校

担当教科 英語

氏名 織田 祐恵

1. 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

本年度は中学2年生を担当しており、総合学習で職業調べや職場体験学習を通し、働くことについて考えると同時に、自分自身の適性を知り、将来の進路を考えていく形で学習を進めています。生徒が「働くこと」や「生きること」について考える際に、外国で働いておられるJICA職員の方々の活躍や、諸外国での子どもたちの様子をぜひ紹介したいと考えました。そして、どのような授業を作ろうかと常に教材作りを意識して参加しました。

- (1) 「生き方」を伝えられる材料を集める。(ネパールの人々・協力隊)
→写真、ビデオに撮る。話を聞く。質問する。
- (2) 生活の様子を見る。(学校、家で衣食住、生活の知恵、気候、日本との違い・同じことなど)
→学校、ステイ先、町中の様子を写真に撮る。
- (3) 一緒に参加される先生方から多くのことを吸収する。
- (4) 日本を伝える。日本について聞いてみる。
→ステイ先に日本から物や写真を持って行く。質問する。

2. 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

最初は、日本との生活の違い・考え方の違いにすごく驚きましたが、子どもたちの明るい表情や、ネパールの発展を願って頑張っておられる方々に教えられることが多かったです。

- 常に私たちに同行してくださったお二人の通訳さんから、ネパール人の生の声を聞くことができた。「ネパール人は国の発展のためにまだまだ頑張らなければならない。…ネパールを知るために、カトマンズ盆地の外を見てほしい。…もし、ネパールが日本の子どもたちに教えられることがあれば伝えてください。」自分の国のこと、そして日本のことも大切に思う気持ちが伝わってきました。
- 子どもたちのあたたかい歓迎。「ナマステ〜！」という元気のいい挨拶はとても気持ちが良かったです。
- 国際協力・支援の難しさ。文化も違えば考え方も違う人々と、コミュニケーションを取りながら活動していくことは決して簡単ではありませんが、そんな中でも一生懸命頑張っておられるJICAの方々の姿を見ることができ元気をもらいました。そして、自立につながる支援の大切さを知りました。

3. 教育指導への活用について

- (1) ネパール、人々の生活の様子
- (2) ネパールと日本の水事情
- (3) 学校の様子・子どもたちの様子
- (4) 子どもたちの夢・思い
- (5) ネパールでの JICA・協力隊の活動
- (6) ネパールと日本のこれから

道徳や学活の時間を使い、総合学習の「働くこと」「生きること」と関連させて授業を作っていきたいです。

4. 研修に関する全般的な所感／意見について

あまりにもたくさんの発見や出会いがあり、うまく消化できないほどの濃い研修でした。支援のあり方・教育の大切さ・幸せ・日本人としての生き方などいろいろなことについて考えさせられました。

子どもたちの人なつこい笑顔や、まっすぐなひとみは忘れることができません。彼らの好奇心にあふれ、純粋で真っ白な心が伝わってくるようでした。私自身はこのようにあたたかい笑顔ができるだろうかとちょっと恥ずかしくなりました。ぜひぜひ、今の気持ちをもったまま成長してほしいなと思います。

逆に、ネパール人の中には、日本に対して「日本人は勤勉で礼儀正しい、発展していてすごくいい国だよ。」と、すごくいいイメージをもってきている人が多く、それに自信を持って答えられる日本人でありたいと改めて思いました。

JICAでは、教育や水道、園芸分野など課題が山積みのそれぞれの分野で、将来的には現地の人自立することを目指した長期的な協力が行われていました。「日本では10年前の技術でも、それを教えてくれることが嬉しい、ありがたい。」という通訳さんの言葉には、自分の国を自分たちの力で良くしたいという熱い思いがこめられているようでした。そして、これまでの日本の支援に心から感謝していました。

10日間のネパール人との出会いを通して、日本人とネパール人が作り上げた50年の歴史を感じました。

5. JICA四国に対する要望・提言

毎日たくさんの所を訪問させていただき、本当に貴重な経験をさせていただきました。また、事前研修で前年度参加の先生方と会う機会をつくってくださったり、事前研修から出発までの間にもメーリングリストを使いたくさんの情報を送っていただいたりしたおかげで、研修のイメージをふくらませ、参加者全員でいろいろなことを共有しながら準備を進めることができました。本当にありがとうございました。

- 協力隊が活動される姿を実際に見ることができよかったです。ネパールでの生活や活動について、訪問先の隊員の方とゆっくり話す時間があればよかったです。
- 最終日に教材集めや買い物を含めて市内見学の時間が半日ありますが、このような日がもう一日途中であれば、参加者が一緒に市内を歩き町の人々の様子をゆっくり見ることができたと思います。
- JICA事務所でのブリーフィングはとても分かりやすく、そのおかげで自分なりの疑問をもってその後の施設訪問に望むことができました。また、所員さんからのご自分の考えを交えながらのお話は、日本とネパールのギャップに対する驚きを緩和させるクッションの役割を果たしてくれたと思います。見学前に聞いて本当に良かったと思います。

6. 今後の本研修参加者へのアドバイス

- 毎日遅くまでかかりましたが、先生方とのミーティングはとても良かったです。同じものを見ても感じることで、考えること、目をつけるところがこんなにも違うのかと、とても勉強になりました。お互いの考えや意見を共有することで、本当に有意義な研修になったと思います。また、一日一日自分の考えをまとめ、素材やテーマを確認するいい機会だったと思います。
- 私のステイ先の家族は英語が話せたのでいろいろなことを話すことができ、言語面で困ることはありませんでしたが、相手の言葉であいさつや感謝の気持ちを言いたかったと思います。少しでも現地の言葉を使えるようにしておくといいと思います。
- 自己紹介のための写真をもっていくのはとても役立つと思います。

7. 各訪問先の所感

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと⇒それを何につなげるか？ その他所感
7月29日(日)	○バンコク市内見学	<p>高層ビル, スカイトレイン, 地下鉄など近代的なバンコクの中にも, まだまだ未開発の町並みが残っていた。夕食後ホテルの裏通りを歩くと, 家族で和になって食事する姿や, カメラを向けるとにっこりほほえむ親子の姿があった。家族のつながりや, 人々の温かさを感じた。</p> <p>⇒これからの世界はますます発展し, 情報化が進み便利な世の中となるだろう。しかし, どんな時代となっても, どんな状況となっても, 人を大切に思ったり, 人との絆を大切にしたりといった「温かい心」をもっていたい。</p>
7月30日(月)	○JICA事務所	<p>2006年11月に7政党とマオイストが協定を結びようやく平和になったネパールだが, 教育分野や社会インフラなどにおいて, まだまだ多くの課題が残っている。そこで, 「こうしたいけど・・・」という主体性・自主性のある人をJICAでは支えていきたいというお話だった。</p> <p>⇒一時的な, または一方的な支援ではなく, いずれは現地の人たちの力でやっていくことを念頭に置いた長期的な支援の大切さを感じた。</p>
7月31日(火)	○カリキュラム開発センター ○国立教育開発センター ○ジャナック教材センター (教科書工場見学)	<p>「ネパールにJICAを知らない人はいないでしょう。」という所員さんの言葉を納得した一日だった。訪問先で活動される協力隊の方や, 逆に日本に研修に行ったことがある現地の方。日本からの支援品だということを感じた数多くの機械。行く先々で「日本の方に感謝しています。」という言葉ももらった。</p> <p>また, 2006年は日本とネパールの国交樹立50周年だったという事で, その時に作られたDVDを見せていただいた。ネパールのために活躍された先人の努力があって, 今の日本とネパールの友好関係が築かれているのだと改めて感じた。</p> <p>⇒今から50年前というと, 日本もまだまだ経済発展のまただ中で, 自国の成長や自分の生活のことで精一杯だったことだろう。そんな中で外に目を向け, 諸外国の発展のために努力を惜しまなかった日本人がいたということが本当にうれしい誇りに思う。今の日本は, 経済や科学技術の面で大きく進歩したが, 一方で, 食糧や天然資源などの諸外国からの輸入がなければ生活が成り立たない。また, 世界的に見ると, 地球温暖化をはじめとする環境問題など, 地球規模で協力して取り組むべき問題が山積みの現状である。世界という大きなレベルから, 地域社会, 学校, 家族といった小さなものまでであるが, どんな段階においても自分のことだけでなく, 周りに目を向けられる人でありたい。</p>
8月1日(水)	○ナバジョティ初等学校 ○プルチョーキ初等学校 ○パタレチャップ初等学校	<p>子どもたちは人なつこく, まっすぐなひとみがとてもきれいだった。教室の窓は小さく, 屋根はとたん, 生徒の机椅子に黒板, 学習に必要な最低限の物だけがあった。そんな中でも, 「勉強したい! 学びたい!」という子どもたちの意欲はすぐ伝わってきた。中でも, 中学生</p>

	○シッデシヨール初等中等学校	<p>に対して「今一番欲しいものは？」の質問に、全員から”Education!”の答えが一斉に返ってきたことが一番印象深かった。国をよくしたい、人々の役に立ちたいと自分の夢を語る子どもたちは希望に満ちあふれていて、未来への意欲が伝わってきた。</p> <p>多くの課題を抱えた教育環境の中で、教師として現地の先生や人々とコミュニケーションをとりながら活動されている協力隊の苦労は大変なものだろうと思う。そのような難しい状況においても、隊員の方々は笑顔で、いきいきと活動していた。</p> <p>⇒教育には道具は関係ない。まずは、伝えたい「教師」と学びたい「子ども」。それさえあれば教育はできると思った。</p>
8月2日(木)	○マノハラ浄水場 ○町中の伝統的公共水場	<p>テレビなどでしか見たことのない水くみを、毎日の日課としているカトマンズ市民がいることに驚いた。1980年代から日本の協力として施設整備を行ってきたそうだが、施設だけを整備するのではなく、現地の人にそれを使い自分たちでどのようにやっていくかを教えることが大切だとおっしゃっていた。また、道路や水道などの社会インフラの整備が進んでいない状況ではあるが、日本のやり方そのままではなく、ネパールの事情に合わせた適性技術を、ということもおっしゃっていた。</p> <p>⇒支援・協力の難しさを改めて感じた。そして、普段自分が使っている水がどれだけありがたいもので、またぜいたくな使い方をしているかを実感した。今の日本の社会システムがあるのも、それを作るために努力した人がいて、今でもさまざまな分野で努力している人がいるおかげで成り立っているのだと感じた。</p>
8月3日(金)	○非正規教育クラスの見学	<p>子ども達の透き通った笑顔と、自分たちで摘んでくれていたお花での歓迎に感激した。経済的事情などで学校に行けない子どものための学校と聞き、子ども達の寂しい、悲しいといった表情を想像していたが、教室に入りとてもあたたかいものを感じた。子ども達からは全く暗さが感じられなかった。愛情をもって大切にされているのが伝わってきた。</p> <p>⇒最近の日本では、家庭や学校での暗いニュースが伝えられ、学校でも不審者情報が次々と入ってくる。人を信用することを難しくさせるような何となくさみしい現状である。ところが、ネパールでは、見ず知らずの日本からの訪問者である私たちに対する子どもたちのまなざしには何の疑いもなく、すべてを受け入れてくれるような大きな心を感じた。心がほっとし、じわっとあたたかくなるようだった。自分たちがもらった愛情をそのまま私たちにも向けてくれているのだろう。子どもたちにあたたかさ・幸せを教えられた。</p>
8月3日(金)～ 8月5日(日)	○ホームステイ	<p>ネパール人の普段の生活を体験することができた。生活を表す衣食住という言葉があるように、生まれ育ってきた土地のものが自分の中に無意識のうちに深く根付いていることを実感した。また、多くのネパール人が日本に対してあこがれや好意をもっていると知り、私たち日本人も自国の良さを見直し大切に残していかなければ</p>

		<p>ればと考えさせられた。 ⇒日本人であることを誇れる生き方をしていきたい。</p>
8月6日(月)	<p>○農場見学 ○市内見学</p>	<p>2軒の対照的な農家を見学した。1軒目では、登るのが困難なほどの急斜面に、さまざまな野菜と果樹が植えられていた。2軒目はある程度整備された農地に、日本種のカキやナシが中心に栽培されていた。</p> <p>話を聞いてみると、日本の農協が行っているような地域をとりまとめするシステムはないようで、それぞれの農家が栽培から販売まで一貫して行っているようだった。JICAによる「園芸普及計画」も2007年7月14日で終了したが、現在でも3名の隊員の方が一層の普及のために引き続き活動しているということだった。</p> <p>⇒各農家が販売まで全てを任されていることを知り大変驚いた。日本人からすると、将来的、または発展のためにはそれがいいという方法が明らかだとしても、現地の人々がそれまでやってきたやり方や、目の前の生活があるので、協力隊の方々はそのらを融合させ、自立につなげるという難しい課題に毎日直面されているのだと感じた。</p>
8月7日(火)	○JICAネパール事務所	<p>日本からの国際協力の人材不足や、ネパール国内でのリーダーの不在、貧困層・女性・障害者の生活改善など、まだまだ取り組むべき課題がたくさんあるというお話だった。</p> <p>⇒一人でも多くの方が幸せに生きていけるように、ネパールの良さを大切にしながら、日本人の代表としてこれからもがんばってほしい。</p>